

なにかと

記憶の風化抱く危機感

身近な「戦争遺跡」を伝える
大西 進さん (73)

戦闘機を隠すため、戦時中につくられた格納庫「掩体壕」を案内する大西進さん＝八尾市

4歳の時、父親がニューギニア島東部で戦死。2003年、近鉄不動産を退職した翌年に遺骨収集団の一員として同島を訪れた。「父はどうやって死んだのか、母が一人で苦労して子どもを育てなければならなかった原因は何か」。そんな思いから、戦争の記録を詳しくたどるようになった。

近所にも戦闘機用の飛行場や軍需工場など、戦争関連の遺跡

があると知った。

例えば、八尾市東部の高安山麓にそびえるコンクリートの巨大建物。幅約23メートル、高さ約6メートルの屋根の下には空洞と畑が広がる。戦時中、旧日本軍が戦闘機を隠すためにつくった格納庫「掩体壕」だ。異様な姿で子ども頃から気になっていた。

だが、人々の記憶は風化していく。危機感を抱いて一昨年、250人以上に取材した著作「日常の中の戦争遺跡」をまとめた。今も遺跡を次世代に伝える活動を続けている。「身近にあるものから戦争を知り、平和のありがたさに気づいてもらいたい」。そう願っている。

(大宮司聡)